

論文

中世伊勢神宮領にみられる多元的支配権の性格

—大福寺・摩訶耶寺間本末訴訟を通して

朝比奈 新

キーワード

莊園 遠江国浜名神戸 通海 在地社会 相論

はじめに

中世伊勢神宮領は、伊勢国を中心に志摩国・尾張国・三河国・遠江国などに設定されていた。伊勢神宮領における莊園支配の解明には、伊勢国内神郡の戸田や寄戸を扱った年貢収取の実態に注目する研究を中心に進められてきた。^①確かに、広範囲に存在する中世前期の伊勢神宮領を、莊園制の中でどう位置付けるか考えた時、第一義的には、莊園領主による年貢収取の実態に、注目することが重要である。

しかし、それだけではなく、在地社会の中で生活する人々にとって、領主としての伊勢神宮がどのような意味をもっていたのか、という視点も重視する必要があると考える。そこで、本論では一三世紀〜一四世紀の領主としての伊勢神宮の実態を、在地社会から広く信仰を集めていた地域寺院との関係から究明していく。在地社会を対象とする研究には、具体的な地域を追求することが求められる。考察は、遠江国浜名神戸^②を対象とし、神戸内にある大福寺・摩訶耶寺間で起きた本寺末寺を巡る相論を扱う。

この相論^③については、『静岡県史』が取り上げるのみである。いまだこの相論に関して専論がないのは、裁許する主体である伊勢神宮側の人物の人名比定ができておらず、相論全体が難解な印象を持つことに原因があると思われる。そのため、第一章では、浜名神戸と大福寺・摩訶耶寺について、在地社会との関係を中心に、基本的な事実を整理しておく。第二章では、相論の関係史料と経緯を確認し、第三章で相論で裁定を下す主体となる人物の、人名比定によって相論の特徴を明らかにする。相論において裁許する主体の権限の機能を考察することで、荘園領主である伊勢神宮が、浜名神戸において、如何なる支配権を行使していたのか明らかにしていく。そのことを踏まえて、在地社会で生活する人々にとつての、領主伊勢神宮の存在について考えていきたい。

一 浜名神戸と地域寺院

1 中世の浜名神戸

伊勢神宮領である浜名神戸は、現在の静岡県浜松市北区三ヶ日町全域に比定される。本田数は一九一丁六段、年貢は四四石八斗であつた。^④浜名神戸が史料上登場するのは、承暦四（一〇八〇）年である。浜名本神戸田が遠江守源基

清によつて、隣接する尾奈御厨三〇余町の作田とともに刈取られる事件が初見となる。建久三（一一九二）年八月日の伊勢神宮神領注文写^⑤に国造貢進であつたと記されることから、鎌倉時代には伊勢神宮領であつたことが分かる。

本末相論が行われていた鎌倉後期には、神戸内の寺院に対し、伊勢神宮は領主としての影響力を持っていた。弘安四（一二八一）年に、神戸内の大福寺に対し、大福寺領内の検断権と狩猟殺生禁止を認めている。また翌年には、祭主大中臣定世から神戸司預所等の大福寺領内での新儀張行停止命令が出されている。^⑦

一四世紀前後には、浜名神戸で、荘官層を中心とした伊勢神宮の現地支配が確認できる。正安年間（一二九九～一三〇一）に、浜名神戸住人の岡本郷先刀禰の実阿が、八講会の費用のために河原一所を大福寺に寄進した。その際、刀禰実阿は神戸司・惣公文の了承を経て大福寺への寄進を行おうとしていた。浜名神戸内では、伊勢神宮の現地荘園管理機構が神戸司を頂点に機能していたと考える。

その後も、延元四（一三三九）年一〇月、祭料として遠江神戸から四石、浜名神戸の政所から八石が伊勢神宮へ納められている。^⑧そして一五世紀に入つても、伊勢神宮の支配は続いている。永享九（一四三七）年五月には、浜名神戸への検昌使派遣が六年ごとにあつた。^⑩文明七

(一四七五) 年四月には、浜名神戸代官堀江小猿丸による押領が見られるようになる。^① 押領されつつも、この後も浜名神戸は、伊勢神宮領と考えられていたようで、天正一〇(一五八二) 年三月には、正親町天皇が徳川家康に、伊勢神宮内宮領である浜名庄の公用の弁済を命じている。^② 以上のことから、中世後期に至っても、浜名神戸は伊勢神宮領として認識されていたことが確認される。

2 大福寺

相論の一方の主体となる大福寺は、静岡県浜松市北区三ヶ日町福長に所在する高野山真言宗の寺院である。大福寺に残る縁起によると、貞観一七(八七五) 年に扇山に創建された幡教寺が、前身であったと言われている。^③ 大福寺の北東に位置する富幕山の中腹には、本堂跡とされる礎石建物跡が残っており、山中には奥の院、複数の宝篋印塔が見られる。^④ 地元では、この地が幡教寺跡と考えられている。現在の地には、承元元(一二〇七) 年三月、大中臣時定によって建立されたことがわかる。その史料から詳しく見ていくこととする。

【史料1】 承元三年大中臣時定寄進状写^⑤

奉施入 大福寺敷地荒野耆処事

在遠江国浜名神戸北原御園内者、

四至

東限直木山路以西小路

南限石仏松本

西限竈谷沢

北限経峰

^① 右件神戸内北原御園者、先祖相伝之領地也、而荒野雖広、土貢如空、徒雖為猪鹿之棲、更有何益、唯成仏法之地、欲伝未來弟子、予雖專敬神之誠、猶無忘帰仏之理、丹悃之所役素懷是已成、去元年之天三月之候、逐建一字之寺門、安教体之仏像、草菴結砌、竹戸開傍所、則天照大神降誕之靈地矣、豈非日域無双之勝境哉、仏又東方医王薄伽之教主焉、殊仰像法転時之上願也、方今為資累祖四恩之菩提、為祈弟子二世之求願、施入件領地、永惠彼仏僧、抑割分神領、建立仏堂者、是非新儀、多訪旧跡許也、所以云仏云神、無異無別、垂跡影向之德、風送散於一天、上求下化之覺、月浮光於万水、論其神慮与仏意、同彼風韻將月光之故也、願三宝照一心、仍以施入如件、
承元三年十月 日 正六位上大中臣朝臣時定

史料上の記載を抜き出してみると、次のようである。
傍線部①をみると、時定が大福寺へ寄進したのは、浜名神戸内北原御園にある、先祖代々所有していた土地であるこ

とがわかる。しかしながら、その土地は荒野となっていた。領主伊勢神宮へ献上する産物の、収穫すらできない状況であったようだ。荒廃した土地であっても、仏の役に立つと考え寄進したとある。続いて傍線部②では、時定は、神を敬う気持ちこそを第一としていたが、仏に帰依することも忘れてはいなかった。そのため、承元元年の三月に草庵を建立し、数体の仏像を安置した。この地は天照大神が降誕した霊地として、優れた場所であるため寄進したと述べている。そして傍線部③によると、伊勢神宮領を寄進して、仏堂を立てる行為は、特段新しい考えに基づいているわけではないという。この傍線部②・③からも、大中臣時定という人物は、伊勢神宮に仕える神官の一人であったことがわかってくる。また、伊勢神宮の長官にあたる祭主大中臣氏の一族だと推測できる。この時期には、伊勢神宮祭主やその一族の間にも、仏教に帰依し、寺を建立する行為はみられるため、傍線部③のような考えにいたったのだらう。

以上、大福寺は大中臣姓の者によって、神宮領の一部を寄進され、建立されたことがわかる。そして、弘安四年九月二八日には浜名神戸司代官戒阿より寺内の検断および殺生禁断を認められている。創建時から鎌倉後期に至るまで、伊勢神宮との深い関わりが確認される。

続いて、在地社会との関わり方をみていく。鎌倉後期

以降、浜名神戸内の荘官層・住人等の広い階層から田畠寄進がみられるようになる。正安二（一三〇〇）年には、岡本郷先刀禰の実阿が、応長元（一三一）年には、浜名神戸司大中臣光信が、それぞれ田地一杖を寄進している。このように神戸司・刀禰といった荘官層による寄進がみられる。また、神戸内の僧侶からの寄進もあった。文正元（一四六六）年には、摩訶耶寺花蔵坊良秀。文明六年には、平山の凌苔庵悟溪が寄進をしている。一方で、買得による土地の集積もおこなわれていた。文明七年に尊意が田地一段一杖、延徳二（一四九〇）年には岡本昌光が大福寺光寿院に田地一段を売渡している。このような田畠の寄進・売渡は神戸内の広範囲の地域でみられる。元弘三（一三三三）年に宇志の住人実阿、元弘四（一三三四）年には多々木の沙汰人忍願・弥四郎、暦応四（一三四一）年には尾奈の大式から田地一段一杖といった形で、神戸内地域から寄進・売渡が行われていたのであった。

ほかにも寛正二（一四六二）年、大福寺不動堂は、浜名神戸内の大半の地域からの寄付によって建立された。「賀茂殿」といった殿原層だけでなく、「岡本郷」「佐久米郷」といった地域共同体からの奉加もみられる。応永一四（一四〇七）年には岡本郷の北原地蔵講より湯釜が施入されていたことから、地域共同体からの信仰を見いだすこ

とができる。また、大福寺は遠江国以外とのネットワークも持っていた。応長元年に行われた大福寺御堂供養では、京都北坂の観勝寺別当浄円御房や三河国の鳳来寺住僧など、各地から多くの僧を招いていた。^{②③}

以上のように、大福寺は、荘園領主伊勢神宮に連なる人物の氏寺として建立され、領主伊勢神宮からは寺内検断を認められていただけでなく、神戸内の広範囲の地域住人や幅広い階層からも、信仰を集めていたことが確認できる。

3 摩訶耶寺（真萱寺）

相論のもう一方の主体である摩訶耶寺は、静岡県浜松市北区三ヶ日町摩訶耶に所在する高野山真言宗の寺院である。本末相論の際は真萱寺と表記されていた。延宝七（一六七九）年に書かれた縁起覚書によれば、神龜三（七二六）年に行基が開創したという。はじめ、引佐町にある富幕山に建てられて、新達寺と称していた。その後兵火にあい、三ヶ日町千頭峯に移ってから、真萱寺と改称した。現在の地に移されてからは、大乘山摩訶耶寺と称すようになった。史料は少ないものの、弘安七（一二八四）年に、大福寺との本末相論に関連したものが初見となる。^{②④}

摩訶耶寺に関する文書はほとんど残っておらず、史料上の制約が大きいものの、断片的な史料から在地社会との関

わりが見えてくる。摩訶耶寺の僧侶は、浜名神戸内で行われていた宗教的行事への参加がみられるのである。応長元年に大福寺で行われた御堂供養では、高座天蓋などを摩訶耶寺が提供しており、舞楽が演じられた際には、摩訶耶寺の兵部公が笙笛、頭日坊が笛を担当していた。^{②⑤}寛正二年には、大福寺不動堂建立に際し、摩訶耶寺は大福寺に五〇〇文の寄付を行い、それとは別に、摩訶耶寺の花蔵坊や五郎左近からも寄付が行われていた。^{②⑥}また摩訶耶寺は、浜名神戸内の広い地域からも信仰を集めていた。天文二一（一五五二）年に津々崎にある白山社の社殿が造立された際には、摩訶耶寺の宝池院朝任が棟札を記している。^{②⑦}天文二三（一五五四）年一月二日、簀代にある八王子社の社殿造営を摩訶耶寺一乗院が担当している。^{②⑧}宗教的な関わりだけでなく、経済的な関係もあったとみえ、摩訶耶寺の花蔵坊においては、土地の集積も行っていた。^{②⑨}

以上のように、中世段階では摩訶耶寺も大福寺と同じように、神戸内の広い地域から信仰を集めていたことを見いだすことができる。こうしたことも背景にあるであろうか、後述するように、本末相論が起きた弘安年間には、摩訶耶寺は大福寺を末寺と称することがあった。

中世伊勢神宮領にみられる多元的支配権の性格（朝比奈）

二 大福寺・摩訶耶寺間の本末相論

1 弘安年間の相論

大福寺と摩訶耶寺との間で起きた本寺末寺を巡る相論は、弘安年間に始まる。まずは時系列に、その経緯を整理することにした。整理したものは、最後に表にまとめているため、本文と合わせて参照いただきたい。なお、本章で引用する『大福寺文書』は、文政一〇年に、裁断されていたものを、当時の住持快雅によって、編年順に表装したものである。まずは、相論がどのように表れてくるのかを素描してみることにしたい。

【史料2】 弘安七年寂禪奉書写^①

^{（端裏書）}
「本所并佐々木豊後守殿御□□案文」

棚橋殿御下知

真萱寺衆徒申舍利会舞童事、大福寺陳狀披露之处、所詮止両寺本末論、成諸僧和合之思慮、遣当寺舞童於真萱、穩可令遂行法会之由、相触大福寺給之旨、仰所候也、仍執達如件、

弘安七年 三月六日

寂禪奉

謹上 浜名香王殿

史料2の端裏書「本所并佐々木豊後守殿御□□案文」は、史料2だけに対応しているわけではない。摩訶耶寺との相

論で、本所や佐々木豊後守殿から、大福寺へ下された文書を一括した際、最初の文書の端裏書に付けられていたものと考えられる。しかし、文政一〇年に快雅によって編年順に表装されたため、無年号の文書などは別々に表装されてしまい、現在は、年号順に史料2・8・4・3の順に並んでいる。この史料2は、史料8とともに、一枚の紙に写されて保管されていた。史料2には本文右上に「棚橋殿御下知」とあり、史料8にも本文右上に、同じように「修理権大夫殿」と付け加えられていることが確認できる。史料2・8は、写された際に本文の右上に、差出側の主体である人物の名を付け加えたものと考えられる^②。本文の内容は弘安七（一二八四）年三月六日、摩訶耶寺（真萱寺）衆徒は舍利会で舞を務めるための童子派遣を、大福寺に要求してきた。それに対し、大福寺側は棚橋殿へ陳狀を提出して対抗した。その結果、棚橋殿の意を受けた寂禪から、和解を命じる奉書が浜名香王宛てに出された^③。両寺に対し、本寺と末寺の関係を巡っての争いを止めるよう求めたのである。そして大福寺に対し、舞童を摩訶耶寺に派遣するよう促した。しかしながら、相論は翌年になっても継続していた。そのことは次の史料から確認できる。

【史料3】 弘安八年大福寺住僧等陳狀写^④

遠江国浜名神戸北原御内大福寺住僧等謹言上、

欲、早停止新儀狼藉、被安堵当寺為同神戸内真萱寺住僧口、指無由緒、宛催舍利会頭役、令群責張行狼藉無双間事、

副進

三通土御門殿御下知案可止末寺号由事、

件真萱寺住僧等、自慢独歩之余、侮当寺尫弱号末寺、恣令押差彼寺舍利会舞童之間、就令訴申子細、被究淵底、可止末寺之儀之由、預裁許之處、不遵行御下知、猶以令繼責之上、今者剩可令動仕舍利会頭役之旨、令誓盟張行之条、監吹狼戾之至不可勝計、依之雖預土御門殿御下知、猶蒙時惣官御成敗、為備末代亀鏡、所令言上子細也、所詮、云末寺称号、云寺僧等新儀乱責、預停止御下知、令安堵当寺、欲竭御祈禱之忠節矣、仍粗言上如件、

弘安八年十二月 日

史料3は、史料2とともに、摩訶耶寺との相論文書として一括して表装されている。一枚の紙に丁寧に書かれていることから、伊勢神宮へ提出した陳状の控として、保管されていたものと考ええる。内容は弘安八（一二八五）年一二月、大福寺住僧等は、伊勢神宮祭主である大中臣定世に相論の解決を求めた。祭主定世に訴えたのは、大福寺・摩訶

耶寺（真萱寺）双方が、伊勢神宮領の浜名神戸内にあることが理由であったと考える。大福寺に出されていた土御門殿御下知状の写しを副えて訴え出たのである。その土御門殿下知状には、摩訶耶寺による大福寺への、末寺強要を禁止する内容が書かれていた。

大福寺側が訴え出た内容は以下のようになる。摩訶耶寺住僧等から、大福寺は摩訶耶寺の末寺であるという主張がなされた。そして、摩訶耶寺舍利会への舞童派遣を要求してきたのである。そのため、大福寺側は子細を「土御門殿」へ訴えた。厳重な審議のもと、末寺の件は停止するようにという、裁許が出された。しかしながら「土御門殿」の命令は摩訶耶寺側に聞き入れることはなかった。そればかりか舍利会の頭役を勤めるよう、強引に誓約させようとしたのである。大福寺は、土御門殿下知状だけでは、摩訶耶寺の狼藉は到底収まらないと考えたのだろう。そのため、「時の惣官」である伊勢神宮祭主大中臣定世からの裁定を求めたのであった。「土御門殿」についての人物比定は第三章で検証する。

また同時期に、舍利会・舞童派遣の件で、神宮側は次のような命令を下している。

【史料4】 弘安八年宗直奉書^⑫

真萱寺衆徒等申舍利会舞董事、大福寺陳状披露之處、

中世伊勢神宮領にみられる多元的支配権の性格（朝比奈

所申尤有其謂者也、所詮於向後者、可被停□真萱寺之偽訴之由、御内談畢、然者大福寺衆徒等、開喜悅之眞、宜令致天長地久之御所禱之由所者也、仍執達如件、

弘安八年十二月十三日 左衛門尉宗直（花押）

謹上 浜名神戸預所殿

史料4は、相論関係文書として、史料2・8の後に表装されていた。一枚の紙に書かれ、花押もあることから、写しではなく、伊勢神宮側から下された正文であることは間違いない。内容は、弘安八年二月一三日、伊勢神宮側では、摩訶耶寺（真萱寺）衆徒等からの舍利会舞童の派遣要求について、大福寺からの陳状も合わせて検討がおこなわれた結果、大福寺が主張する内容に正当性があるという結論にいたった。そして摩訶耶寺の偽訴を停止するよう命令が下されたのである。

以上、弘安の相論をみてきたが、大福寺住僧等は、当初は、「土御門殿」に摩訶耶寺との相論の調停を依頼していた。それに答える形で、「土御門殿」から相論解決のための下知状が三通出された。それでも相論が終息しないため、祭主定世による裁定を求めたのであった。相論で焦点となっている本末関係と舍利会頭役・舞童派遣とは、具体的にどのような主張がされていたのだろうか、次の正応の相論の

中で詳しくみていく。

2 正応年間の相論

正応五（一二九二）年正月に再び、摩訶耶寺と大福寺間に相論が起ころ。この正応の相論では、大福寺・摩訶耶寺双方の主張が具体的に確認できる。そのため詳しくみていくこととする。

【史料5】 正応五年大福寺住僧等申状写⁴³

大福寺住侶等謹言上、

為真萱寺寺僧等、以当寺号末寺、舍利会頭役并舞童、年来勤仕由、就企鬱訴、任先例可令催勤旨之蒙御裁許、令致群責愁歎状、

副進 当寺根本建立状案

右当寺者、根本大中臣朝臣時定^{法名}、建立創草之地、東方医王薄伽応迹之砌也、仍全朝暮之勤行、併奉祈天長地久之御願処也、爰真萱寺々僧等、僑自慢、恣以当寺号末寺、舍利会頭役并舞童年来勤仕之由、企謀訴之条、自由所行也、此条前司³、棚橋法印御房、両方究淵底、預落居御下知畢、所謂於末寺義者、根本大中臣時定建立彼寺門、奉崇数体仏像之節、真萱寺々僧滝専房・智学房、為帰僧之分令移住計也、是非常法哉、以之強号末寺之条、所勘甚也、然則所令

備進根本建立之状、龜鏡也、是一、次於頭役段者、真萱寺荒廢之刻、舍利會頭役及闕如之處、前御知行時、故右衛門入道殿為御計、神戸内殿原并所司沙汰人等、平均結縁之最中、於當寺衆徒等、此事且積尊報恩仏事也、且諸人随寄結縁也、近山習僧徒法、尤可扶持之由、就蒙仰、有得仁等、一旦雖令結縁之、於彼頭田者、御得替以前令返献畢、此等子細、古老之仁令存知事也、有御尋、不可有其隱者哉、就中去弘安十一年之候、令興行當寺舞樂於、擬遂行法会折節、堂舎令焼失、雖然於灰土之上遂之畢、其後作事造営之間、雖不令勤行之、於自今以後者、為一寺興行於舞樂、致御祈禱之精勤上者、縱雖有年來勤仕之例、為無縁之地、不可遂兩寺經営、何況以一往結縁之義、閑當時勤行、可勤仕他寺所役之条、愁鬱何事如之哉、尤所仰賢察也、是二、次於舞童篇者、為諸寺諸山之法、相互雇遣之事、不及異論、前々触縁付面令雇之、近者故阿々弥陀以付延性房、令雇之条勿論也、所詮被止真萱寺非分之催勤、全當寺之勤行、可致御祈禱之忠節之由、為蒙御裁許、粗恐々言上如件、

正応五年正月 日

史料5は、文政一〇（一八二六）年に編年順に表装されてしまったため、弘安の相論関係文書とは別に配置され

史苑（第七五卷第一号）

た形で保管されていた。堅紙を数枚繋げて丁寧に写されており、正応五年、大福寺住僧等が、伊勢神宮側に提出した申状の控えとして作成されたと考えられる。内容について、傍線部①によると、再び摩訶耶（真萱）寺の寺僧等が、大福寺は末寺であると主張してきた。さらに舍利会の頭役・舞童派遣を負担するよう、大福寺に圧力をかけてきたのである。そこで大福寺住侶等は、伊勢神宮側の裁許を仰ぐこととなった。

傍線部②では、弘安年間の相論がどのような経過を辿ったのが、述べられている。弘安の相論では、摩訶耶寺の寺僧等が、大福寺を末寺と主張し、舍利会の頭役や舞童を数年来勤めるよう偽訴を企んできていた。この件については、棚橋法印御房のとき、摩訶耶寺・大福寺双方の主張を深く検討し、判決が下された。つまり、相論は弘安年間に一度決着していたのである。しかし、摩訶耶寺が再度、大福寺に本寺末寺の関係を持ち出してきた。そして頭役や舞童派遣を強要してきたのである。このことから、弘安年間の裁定は摩訶耶寺側にとって、とても承服できる内容ではなかったことがわかる。

大福寺住侶等は、この申状の中で、摩訶耶寺に対する三つの弁論を展開している。一つ目は、本寺末寺関係について、大福寺側の主張が述べられている。傍線部③によ

中世伊勢神宮領にみられる多元的支配権の性格（朝比奈）

ると、大中臣時定によって大福寺が建立された際、大福寺には寺僧がいなかったので摩訶耶寺僧の滝専房・智字房が、大福寺へ移ってくるという方法がとられた。この事例を根拠に、真萱寺は大福寺を末寺化したと考えているようである。対する大福寺側は、これはあくまでも非常時の対応だと主張する。この移住をもって、末寺である証拠にはならないとしている。この摩訶耶寺の主張は、当時としては決して特殊なものではなかった。中世にみられる本寺末寺關係を規定する考えからきていたのであった。¹⁵⁾

二つ目は、舍利会頭役に関する主張が述べられている。傍線部④によると、摩訶耶寺が荒廃していた時、舍利会の頭役が欠如するという事態に発展した。その時は、故右衛門入道殿の計らいで、大福寺は浜名神戸内の殿原・所司沙汰人等と協力して、なんとか摩訶耶寺の舍利会を営むことができた。大福寺衆徒等が勤めたのは、仏道の縁に随っただけであつた。しかし、この件によって大福寺衆徒等が、摩訶耶寺の舍利会費用を負担する根拠と、捉えられていたことが確認できる。

三つ目は、舞童派遣についての主張が述べられている。傍線部⑤によると、大福寺は諸寺諸山の法として、相互に舞童を派遣することには異論はないとしている。以前からも、両寺間で派遣は行われていた。近年でも故阿阿弥陀が

延性房を付けるのををもって、雇い入れることがあつたと主張している。舞童の派遣については、双方から派遣するシステムは、諸寺諸山の法で定着していたことがわかる。舞童派遣について問題は起きないはずであつた。しかし、摩訶耶寺の主張は、末寺から舞童を勤めさせることにあるため、大福寺側からの反発を招いていることが確認できる。

以上、正応年間の相論を見ていくことで、この本末相論の両寺の主張が明らかとなつた。本末相論だけでなく、舍利会頭役・舞童派遣という異なる三つの問題で争っていたのであつた。また、弘安年間の相論は、「棚橋僧正」によって裁定が下されていたことが確認できた。この棚橋僧正とは、史料2でみられる「棚橋殿」と同一人物であるのだろうか、また大福寺・摩訶耶寺と、どのような関係なのか、第三章の中で詳しく検証を行うことにしたい。

3 康応・明徳年間の相論

康応二（一三九〇）年、今度は本末相論が転じて座位を巡り、大福寺と摩訶耶寺が争うようになる。次の史料は、大福寺住僧等が、摩訶耶寺側による乱行の停止を求めた申状の下書きである。

【史料6】康応二年大福寺住僧等申状土代¹⁶⁾

□□□浜名神戸大福寺住侶等謹言上、

欲早罷蒙有道之御成敗、被停止謀計乱悪、全長日勤行、弥臻御祈禱精誠間事

右当寺者、医王善逝之靈地、十二大願之砌也、故致
帰依之人、預衆病悉除利益、凝信敬之輩、蒙十二神
將擁護、爰開闢以降、都無他方之違乱处、^①广詞耶寺
僧徒等、自慢独歩之余、恣巧新義猛悪、称末寺虚名
之条、存外狼籍、敢不可勝計、此事去弘安年中落居
畢、^②世以無隱、人以知之、上古既無許容、当代豊爾
哉、加以彼寺衆徒代、近年罷下関東、座敷左右申上
处、可為宿老次第御奉書申成、乍持参当山構自由偽訴、
掠申上裁条、自語相違、其過難遁、万事以之可有御
還迹哉、

大福寺側が主張する内容を、要約すると以下のようになる。
傍線部①によると、過去に摩訶耶寺僧徒等が、大福寺は末
寺であると主張してきた。この本末相論は弘安年間に
決着しており、事の顛末は世間でもよく知られているとい
うことであった。傍線部②では、それにも関わらず、近年、
摩訶耶寺衆徒代が、関東の鎌倉府に訴え、大福寺より上座
に位置しようと企みた。その結果鎌倉府からは「宿老の順
番に従うように」という御奉書が出されることとなった。
当然、摩訶耶寺側は、鎌倉府の奉書を根拠に、大福寺より
上座に位置することを主張してきた。このような鎌倉府へ

偽りの主張を行った摩訶耶寺の行為は、罪に問われるべき
だと、大福寺住僧等は述べている。

この鎌倉府から出された奉書は、次に紹介する蘊暉書状
のことだと考えられる。

【史料7】年末詳蘊暉書状^④

法華經供養之時、摩訶耶・大福両寺僧侶、会合烈座
之事、任貞永御成敗之旨、随臈位令着座、可被遂法
会候、猶以及違儀者、可有異沙汰候、恐々謹言、

六月十三日

蘊暉（花押）

大福寺衆徒中

内容は、法華經供養を行う際の、摩訶耶寺と大福寺の僧侶
の座次については、貞永の御成敗の旨に任せて、出家受戒
後の年数によつて着座するよう、大福寺衆徒中へ伝えてい
る。年末詳ではあるが、史料6との関係からも、遅くとも
康応元年六月には出されていたものと考ええる。この「蘊暉」
について、関連する史料は残されていないが、一五世紀初
頭の鎌倉府の訴訟関係文書中などに「蘊」の法名を用いる
人物の存在が確認できる。法名「蘊誓」で署名をする人物や、
応安元（一三六八）年に円覚寺大般若經刊行を助縁してい
る「蘊阜」がいる。史料7の「蘊暉」の「蘊」は、法名「蘊
誓」の「蘊」の異体字であり、同じ漢字を用いていると考
えてよいだろう。「蘊誓」については、佐々木近江守基清で、

鎌倉公方の近臣であった。応永九（一四〇二）年から応永二〇（一四一三）年まで、鎌倉府の御所奉行を務め、訴訟を審理する評定衆の一人であった。「蘊阜」については佐々木信濃入道であり、これも佐々木氏の一族であった。このことから、「蘊」や「蘊」の字を用いた法名を使用するのは、鎌倉府御所奉行の佐々木氏であった。つまり、史料⑦は鎌倉府御所奉行の佐々木氏から出されたものと考えられる。

それではなぜ、遠江国の寺院間相論に、鎌倉府が関与してくるのだろうか。もう少し深く追ってみることにしたい。康応二年の時点での遠江国守護は、今川仲秋が務めていた。今川貞世の弟で、肥前守護を経て後、遠江守護となり、一時尾張守護も務めていた人物であった。足利義満の出家を機に、応永二（一三九五）年に出家している。このことから、室町將軍家との結びつきが強い。鎌倉府との関係においては、守護今川氏が、摩訶耶寺との間を仲介するような接点は見いだせない。他に、鎌倉府との間を取り持つ存在がいると考える。摩訶耶寺と同じ浜名神戸内に拠点を持つ在地領主層に注目してみると、浜名氏の存在が浮かんできた。当時、在地領主の浜名氏は鎌倉府と親密な関係にあった。浜名氏は至徳二（一三八五）年一月に、浜名政信が円覚寺大義庵に、上野国菌田御厨内東村上村の所領を寄進している。その際、作成された寄進状の封裏に、鎌倉府御

所奉行人の布施家連と清是清が証判を加えている。そして御所奉行人が証判を加えた同日に、鎌倉公方足利氏満がこれを安堵している。まだ検討の余地を残しているが、摩訶耶寺は、浜名氏の仲介によって、鎌倉府に訴ええることができたのではないだろうか。

また、康応年間の相論では、貞永の御成敗の旨に任せて、裁許が下されている。このことから、一四世紀末である康応の訴訟で、一三世紀前半の貞永年間に為政者などから出された下知状が証拠として用いられていた可能性がある。しかし、現存する「大福寺文書」の中で、貞永年間にあたる一三世紀前半の本末相論に関係して出された文書は確認できない。本末相論に関連する文書の中で、後欠のため年月日が確認できない「修理権某大夫下知状案」のみが該当する。この下知状が康応の相論において、証拠書類として提出されたもののだろうか。その「修理権某大夫下知状案」を用いて検討していきたい。

【史料⑧】（年月日未詳）修理権大夫某下知状案^⑧

修理権大夫殿御下知

遠江国浜名神戸北原御菌内大福寺衆徒等申真萱寺末寺否問事、如状者、不見其由緒歟、早止末寺之儀、至舞童篇者、且為仏事、且為御（後欠）

修理権大夫某が大福寺へ宛てて出した下知状である。内容

は、大福寺が摩訶耶寺末寺である由緒を否定し、本末相論の停止を命じている。貞永の御成敗の際に作成された下知状であるなら、修理権大夫とは、一三世紀前半に遠江国守護職に就いていたとされる北条時房を念頭に置いているものと考ええる。実際、一三世紀前半に、時房は遠江国内へ下知状を発給している例はある。史料9を見てみよう。

【史料9】嘉禄三年北条時房下知状⁵⁹⁾

北条時房
(花押)

下 蒲御厨住民等

可令早源吉祥子為上郷内田畠地頭代職事

右人、任親父清倫議状之旨、為彼職守先例、可致沙汰之状如件、住民等宜承知、勿違失、以下、

嘉禄三年十月十二日

嘉禄三（一二二七）年一〇月一二日に、遠江国蒲御厨の住民に対し出された袖判下文である。同じ遠江国に守護北条時房下文が出されていたことを考えれば、史料8も貞永年間に出された北条時房下知状として提出されても不思議ではない。康応年間の本末訴訟の際に、証拠として鎌倉府に提出されたのは、北条時房が下したとする「修理権大夫下知状」であったのではないだろうか。この「修理権大夫下知状案」は『静岡県史』等でも「北条時房下知状写」と比定されてきた。そのため、推定年代も、北条時房の遠江守

護在任期である一三世紀前半とされていた。大福寺・摩訶耶寺の本末相論が、半世紀程遡って行われていたという理解がなされていたのである。しかし、実際に時房が修理権大夫に就いていたのは、嘉祿二（一二三六）年二月から延応二（一二四〇）年一月までで、貞永年間に提出されていた書状は「相模守」で署名をしている。修理権大夫で署名するようになるのは、嘉祿年間に入ってからであった。内容も、弘安年間の相論で論点とされている末寺の儀と舞童派遣と共通性が高い。一四世紀末の康応年間には、時房下知状とされていたとしても、実際は、弘安の相論の際に、別の人物によって出されている蓋然性が高い。また、「貞永御成敗」が、単純に貞永年間に制定された御成敗式目のことを指していて、最初から貞永の下知状など、存在していなかったことも充分に考えられる。史料8で取り上げた修理権大夫の人物比定については、第三章で詳しく検討する。そのため、本節では康応年間に修理権大夫下知状が北条時房下知状と考えられ、鎌倉府に証拠として提出されたということにしておく。

話を康応の相論に戻すと、康応二年二月に申状を提出した後、さらに同年八月にも大福寺住僧等は、具体的な証拠を示した起請文を用いて反論を行っている。次の明徳元（一二三九〇）年八月に作成された起請文をみてみよう。

中世伊勢神宮領にみられる多元的支配権の性格（朝比奈）

【史料10】明徳元年大福寺住僧等連署起請文⁵³

再拜々々立申起請文事

右元者、

一自当寺開山以降、両寺座敷無左右之定事

一両寺本末之言、無其謂事、当寺者教待和尚御建立

貞觀十七年乙未、雖經多年星霜、彼地依為魔所、明性阿闍梨

憑時領主時定、前山奉移置剎、摩訶耶寺智学房・

了仙房云者、憑当寺居住、此為事便、中比瞻西釈

然房云者、末寺之由雖訴公方、依無其理、棚橋僧

正御前、両寺均等之御沙汰落居畢、依之彼寺尚遺

恨之余、当寺堂舍放火^{々云}、

一如法經開白之年永徳元^{壽等}当寺三位律師左、摩訶耶寺

讃岐阿闍梨右仁着座事

一^{康応元年}神明社頭大般若經転読之時、当寺式部阿闍梨左、

彼寺侍従阿闍梨右仁箸座事

一当寺亮空律師並三位律師左、摩訶耶寺大輔阿闍梨

右仁箸座事

一彼寺御堂上葺之時、全自当寺不造営事

一当寺御堂供養之時、摩訶耶寺頭日房・兵部公了円房、

為役人事

この起請文は、全文、熊野山牛王宝印紙を三枚継いだ裏に書かれている。差出所には大福寺住僧一七人の署名と花押

が副えられている。正文であることから、上申する際に二枚作成されたうちの一枚が残されたと考えられる。起請文に書かれた大福寺の主張は、次の通りである。一条目では、大福寺の開山以来、摩訶耶寺との間で座次は定めていない。二条目では、承応元年に大福寺が現在の地に移転した際、摩訶耶寺の僧智学房・了仙房が一時居住していた。このことを根拠に、弘安年間に摩訶耶寺が大福寺を末寺と称してきた。摩訶耶寺は「公方」に訴えたが、公方（＝祭主⁵⁴）への訴えは道理に合わないといわれた。そのため、棚橋僧正によつて、両寺均等な裁きがおこなわれた。三条目は、永徳元年の如法經開始の際の座次は、大福寺の三位律師が左で、摩訶耶寺の讃岐阿闍梨が右であった。四条目は、康応元年、浜名惣社神明社での大般若經転読の際、大福寺式部阿闍梨が左、摩訶耶寺侍従阿闍梨が右に着座していた。六条目は、摩訶耶寺の御堂上葺の時、大福寺は全く関与していない。七条目は、大福寺御堂供養の時、摩訶耶寺の頭日房・兵部公了円房が笛で参加していた。

同年五月に同様の内容で書かれた起請文案の端裏書に「大福寺京都へ・起請案文⁵⁵」とある。史料6の「大福寺住僧等申状」を含めた、康応・明徳の相論は、京都へ訴訟が持ち込まれたと考えることができる。

以上、康応・明徳の相論の内容をみてきた。本末相論

に關しては、弘安年間に裁定が下されていることが自明の事であつたことがわかる。この弘安の相論では、当初は、「土御門殿」が裁定を下す立場にいた。それでも相論が終結しないため、莊園領主である伊勢神宮祭主の元へ、訴訟が持ち込まれた。しかし、結局は棚橋僧正の御前で訴訟がおこなわれ、決着したとされている。相論の裁許をめぐって、それを裁許する権限は「土御門殿」「祭主」「棚橋僧正」「修理権大夫」と多元化されていたことになる。莊園領主である伊勢神宮祭主の他に「土御門殿」「棚橋僧正」にも、権力を行使するための固有の機能が存在していたのである。そこで、次章では、祭主とは異なる固有の権限を行使している「土御門殿」「棚橋僧正」「修理権大夫」について明らかにし、浜名神戸内にみられる多元的支配権の性格を考察することにした。

三 浜名神戸における多元的支配権

1 土御門殿

大福寺に下知状を出した「土御門殿」とは、伊勢神宮と如何なる關係にあるのか見ていくこととする。当該時期に「土御門殿」と呼ばれていた人物を探すと、まず一三〇〇年頃の紙背文書群にみえる藤原重氏書状が注目さ

れる。それによると、

【史料11】年未詳藤原重氏書状⁵⁶

土御門殿御補任惣官候之由、伝承候、即令参洛可賀
申入候之處、遼遠之上、難去子細候之間、以代官申
上候、抑尾張国但馬神戸司職住料用途、任先例、参
結令沙汰進候、代々為御奉行御存知候上者、任補
可申御沙汰候哉、恐々謹言、

二月十八日

藤原重氏狀

謹上 河崎三郎大夫殿

とある。土御門殿が惣官つまり伊勢神宮の祭主に補任された。その際、藤原重氏の代官が土御門殿に祝辞を述べるため上洛した。重氏は尾張国但馬神戸司職として現地にいたと考えられる。鎌倉時代、伊勢神宮の祭主で、土御門殿と呼ばれている人物がいたことが確認される。

さらに、元弘四年頃に作成されたと考えられている「伊勢大神宮御領注文」によれば、伊予国には「前祭主御領」の玉河御厨があつた。その領主に「土御門卿」の名が確認できる。玉河御厨は、能隆卿の子々孫々が相伝していたことから、能隆の子孫が一四世紀前半に土御門殿と呼ばれていた⁵⁷。この能隆卿とは、「祭主補任」によると、大中臣親隆の三男で、文治元（一一八五）年伊勢神宮祭主、建久元年には神祇大副に任じられていた。天福二年に八九才で

中世伊勢神宮領にみられる多元的支配権の性格（朝比奈）

亡くなっている。能隆の子孫を確認すると、複数の家に分かれており、どの家も祭主を代々歴任している。「祭主補任」をみると、

能隆	隆通	隆世	隆蔭	定世
為繼	隆蔭	定世	隆直	為繼
定世	隆直	為繼	定忠	為連
經蔭	定世	蔭直	隆実	親忠
隆実	蔭直			

という流れで祭主は継承されている。名前を四角く線で囲っている人物が、能隆の子孫に該当する。歴代祭主のほとんどが能隆子孫の系統に属していることがわかる。系図と祭主の補任から考えて、能隆卿の子孫とは、この祭主職を占有する確率が高い家筋であることが確認される。^⑤この家筋は、伊勢の岩出館に屋敷を構え岩出を号する「岩出流祭主家」のことである。史料11の「土御門殿」と、玉河御厨の領主である「土御門卿」に、一四世紀前半で当てはまる人物は存在する。その人物とは「土御門殿」「岩出南殿」と呼ばれていた大中臣隆直のことであった。^⑥

この事実を手掛かりに、本末相論の起こっていた弘安八年段階の土御門殿についての確定を試みる。弘安八年当時、能隆子孫で「岩出流」の系統は、大中臣隆直流と大中臣定世流の二系統に分かれていた。史料3では、大福寺住

僧等は、土御門殿の御下知の他に、祭主定世の裁許状を所望している記事がある。この点に注目すると、祭主定世と土御門殿は別人物であることが分かる。もう一方の岩出流の系統の隆直は、一四世紀前半に「土御門殿」と呼ばれていた前述の蔭直の父親にあたる。弘安八年段階では「土御門殿」と呼ばれていたのは、大中臣隆直である蓋然性は高い。

大中臣隆直の系統は、「土御門」だけでなく、他の呼称も用いていた。歴代の伊勢神宮祭主を列記している「二所太神宮例文」によると、大中臣隆蔭が「棚橋殿祭主」と呼ばれていることがわかる。つまり、隆蔭のことを指す呼称で「棚橋殿」が使用されていた。しかし、史料2の出された弘安七年段階には、隆蔭は既に亡くなっており、後を隆直が継いでいたことから、「棚橋殿」とよばれるなら、息子の隆直になる。

このように、大中臣隆直が「棚橋殿」「土御門殿」という二つの称号をもつには理由があった。伊勢神宮の祭主職につく家柄の者は、京都と伊勢の二ヶ所に邸宅を所有していた。祭主が称号を用いる場合、京都では平安京の条坊に則して邸宅地の名称が使用される。伊勢では宿館を構えた場所の地名を用いている。邸宅・宿所を相伝すれば、称号も継承されていくと推測される。^⑦大中臣隆蔭の系統であ

る隆直―蔭直親子は、京都の拠点である「土御門殿」、伊勢の拠点の「棚橋殿」、という称号を使い分けて呼ばれていたのではないだろうか。

以上、「土御門殿」「棚橋殿」と呼ばれていたのは、祭主一族の大臣隆直であったことは確認された。史料3で、証拠文書として提出された「三通 土御門殿御下知案」は、史料2の「棚橋殿御下知」とされた寂禅奉書であると考えられる。大福寺衆徒等から、「土御門殿」「棚橋殿」と異なる呼称で呼ばれていたのは、隆直が、祭主に就く正応元年までは、京都に邸宅にあり「土御門殿」と呼ばれていたと考える。史料2の「棚橋殿」については、伊勢国棚橋の宿館を父隆蔭から譲られた後、正応元年二月一九日に祭主に就任後、伊勢国棚橋に居住して以降、呼ばれたのではないだろうか。

以上のことから、岩出流祭主家出身の隆直には、大福寺と摩訶耶寺の本末相論に対し、裁定を下すという、固有の機能が存在していたのである。

2 修理権大夫

史料8で、大福寺・摩訶耶寺間の本末相論の裁定を下していた人物「修理権大夫」について考察していくこととする。史料8は史料2と同じ一枚の紙に写されて保管され

ていた^②。その紙の端裏には、「本所并佐々木豊後守殿御□□案文」と書かれている。このことから、史料2と史料8は、本所伊勢神宮と佐々木豊後守から出された書状を写したものであることになる。紙には史料2に続いて、史料8が写され、史料8の後半以降が欠損した状態であった。史料2が弘安七年に出された文書であることから、史料8も、弘安七年に近い時期に出された文書であると考ええる。「本所并佐々木豊後守殿御□□案文」と複数の文書を対象にして、注記されていることを考えれば、本所伊勢神宮と佐々木豊後守殿からの書状のみ整理し、一括して保管した際に端裏に付けたものと考えることができる。大福寺文書を表装した際に書かれた「文政一〇年住持法印快雅表具覚書」によると、中世以降、一括して保管されていた本所と佐々木豊後守殿からの書状などは、文政一〇年までの間に分散してしまったことがわかる。現在、大福寺で保管されている文書群は、文政一〇年に、当時の住持快雅によって編年順に表装されたものである。弘安七年三月に出された史料2の次に史料8がきて、次に別紙で弘安八年一二月の史料4、次に別紙で史料3の順に並んでいる。史料8も、弘安年間に出色されていたと考えていいだろう。写された際に、本文右上に小さい文字で史料2は「棚橋殿御下知」史料8では「修理権大夫殿御下知」と書かれている。史料2「棚橋殿」

中世伊勢神宮領にみられる多元的支配権の性格（朝比奈）

が、前節で大中臣隆直であることが確認された。文書の保管状況から、まず考えられることは、史料8「修理権大夫」は佐々木豊後守のことを指しているのではないかということである。しかし、弘安の相論に佐々木豊後守が関与することは不自然である。

そこで、佐々木豊後守について、如何なる人物で、大福寺へ下知状を出す立場にいたのか検証を行うこととする。「佐々木豊後守」とは「佐々木系図」によると、弘安年間に該当するのは、佐々木頼氏である。頼氏は、弘安八年一月の霜月騒動での恩賞によって豊後守に任じられている。⁶⁴霜月騒動とは弘安八年一月、安達泰盛一族らが執権北条貞時により滅ぼされた事件であった。一月一七日、鎌倉の塔ノ辻の館を中心にして戦いが行われ、泰盛一党の大半が滅びた。安達氏の一門をはじめ、守護層の小笠原氏、三浦氏や、御家人層の二階堂氏など、自害した者や討たれた者は五〇〇人にのぼる。⁶⁵霜月事件は鎌倉周辺だけでなく、遠江国にも波及しており、安達泰盛の甥城太郎左衛門尉宗顕が遠江国にて自害している。⁶⁶遠江国には、安達泰盛が地頭を務める笠原荘があり、宗顕は現地に派遣されて騒動に巻き込まれたものと考ええる。佐々木頼氏は、霜月騒動による恩賞で、遠江国にある安達氏の遺領を与えられたため、大福寺との関係が生まれたと考えることができる。その証

拠に、笠原荘以外にも、遠江国内には安達泰盛方の所領が確認できる。その一つが大福寺・摩訶耶寺のある浜名神戸であった。浜名神戸についての記事がみられる、醍醐寺三宝院通海作の『太神宮参詣記』から見ていく。

【史料12】太神宮参詣記⁶⁷

但其時ノ太神宮ノ御勲功ノ勲賞ニ寄ラレシ遠江国浜名神戸ハ、大江助朝弘安八年ニ武威ヲ以テ神宮任符ヲモチイス、同職ヲ横ニ奪取テ侍リシカ、其年ノ冬助朝父子城ノ入道ノ手ニテ討レヌ、後ニ武家没所トナリテ、

それによると、遠江国浜名神戸では、弘安八年に、大江助朝が、伊勢神宮からの許可を得ることなく、武力で浜名神戸の職を奪い取ったことがわかる。その年の冬に大江助朝父子は、城ノ入道（＝安達泰盛）の手の方であったことから討たれる。その助朝の遺領は鎌倉幕府の没所とされたことが書かれている。弘安八年、浜名神戸は安達泰盛方に属していた大江助朝によって押領されていたことが記されている。

そのことは、次の史料からも確認できる。

【史料13】弘安八年浜名神戸司大江助長申状⁶⁸

遠江国浜名神戸司大江助長謹言上、

為出羽五郎家親乱入当神戸内大谷大崎、令殺害馬

允吉宗□□科難遁、然者、早可被停止家親乱入狼籍由、欲被下 院宣子□□、

右、□子細者、助長依爲開発領主之正流、忝預巖蜜之聖斷之处、彼□□違背 院宣、致乱入当神戸内大谷大崎、令殺害助長郎從馬允吉宗□、希代之悪行、何事過之哉、然者、至殺害之篇者、於関東有其沙汰□□停止家親乱入狼籍、助長爲預安堵之 院宣、恐々言上如上件、

弘安八年九月 日

弘安八年九月に、浜名神戸司大江助長が、出羽五郎家親の浜名神戸内大谷・大崎への乱入狼藉の停止を求めて、院宣を請うている。通海の記述通り、弘安八年に、大江氏が浜名神戸司に就いていることがわかる。史料12の大江助朝は、助長のことを指していると考ええる。そして、大江助長は浜名神戸司の立場を利用し、八月には、神戸内の藤吉名を押領して、伊勢神宮側から訴えられている。十一月七日にも、伊勢神宮から訴えられていることから、霜月騒動によって、大江助長が討たれる十一月一七日あたりまで、神戸司として現地支配を行っていたことがわかる。この大江助長という人物については、「大江系図」などには該当する人物は確認できない。ただし、助長と同じ大江姓の中には「佐房」「佐時」「佐泰」といった「助長」を連想させるような名を

持つ「尾張大江姓」の系統がある。^①「尾張大江姓」の「佐泰」の子「泰廣」孫「盛廣」「泰元」は、弘安八年十一月の霜月騒動で安達泰盛方として、同時に死去している。大江助長も安達泰盛方として、弘安八年十一月に討たれていることから、大江一族の系統に属す人物であると想定される。この安達泰盛方の大江助長が押領していた浜名神戸司を、佐々木頼氏が、霜月騒動の恩賞として、受領したのであれば、大福寺に頼氏の下知状が出された理由がわかる。しかし、頼氏は、豊後守には就いているが、修理権大夫であつたことは確認できない。史料8の「修理権大夫下知状案」が出されたのは、文書の伝来状況からも、史料2に近い、弘安七年頃であると考ええる。そのため、弘安七年頃、修理権大夫として浜名神戸や大福寺に下知状を発給できる立場にいた人物でなければならぬ。史料2が出された弘安七年三月頃に、修理権大夫の職に就いていたのは、本所伊勢神宮の祭主家出身の大中臣隆直であつた。弘安元年一〇月一〇日から弘安七年七月二六日まで、修理権大夫に就いていた隆直の下知状である蓋然性が高い。^②弘安年間の相論に關連して、出された下知状であつたと考えられる。

つまるところ、「棚橋殿」「修理権大夫」が大中臣隆直であることから、史料2と8の端裏書に書かれていた「本所」からの下知状案とは、史料2の「棚橋殿下知状案」と

史料8の「修理権大夫殿下知状案」の二通のことを指していると考ええる。佐々木豊後守殿の下知状は、史料8の後半が欠損していることから、本来は、この史料8に続けて写されていたと考えられる。以上、史料8「年末詳修理権大夫某下知状案」の修理権大夫とは、大中臣隆直の下知状案に比定される。そのことから、康応年間に北条時房下知状として、鎌倉府に提出されたと考えられるのは、弘安七年の大中臣隆直下知状であつたのではないだろうか。

3 棚橋僧正

棚橋僧正とは、醍醐寺金剛輪院の開基である通海のことである。伊勢神宮祭主家の菩提寺大神宮法楽寺の、寺務を相承した人物でもある。法楽寺のある地名から、「棚橋僧正」とも呼ばれていた。通海は、祭主大中臣隆通の子として、天福二（一二三四）年に生まれる。兄弟には、祭主に任じられた隆世と隆蔭がいる。その祭主家出身の通海が、大福寺と摩訶耶寺の本末相論を、裁定する理由を考えてみる。

まず一点目は、通海は祭主大中臣家の氏寺である法楽寺を、主宰していたことがあげられる。法楽寺は一一世紀前後に創建された。当初は蓮華寺といったが、通海の時に、寺号を大神宮法楽寺と改めた。場所は三重県度会郡に

あり、真言宗醍醐寺派の寺であつた。法楽寺領は二四ヶ寺に渡っていた。^④法楽寺領の一つ、釈尊寺は、一一世紀前後に、祭主大中臣輔親によって建立された。輔親は、長保三（一〇〇一）年から三七年間に渡つて、祭主の地位にいた人物である。釈尊寺は、大中臣氏出身の法師によつて寺務を執り行うよう決められていた。一時期、大中臣氏出身以外の僧侶によつて、相伝されていたが、建長年間以降は、大中臣氏出身の僧侶によつて、管理されるようになっていた。^⑤通海の主宰する法楽寺末寺には、大中臣氏の氏寺である釈尊寺も含まれていたことがわかる。大福寺についても、承元元年三月に大中臣時定によつて、先祖相伝の領地であつた浜名神戸北原御薮内の、「神領」を割き分けて仏堂が建てられた経緯がある。そして今回の相論の起きた弘安年間にも、祭主家の大中臣隆直や、神戸司代官戒阿から、寺領内の検断権と、狩猟殺生禁止の権限を認められている。このことから、大福寺は、祭主家である大中臣氏に関連する氏寺であつた可能性がある。通海は、法楽寺を主宰する立場で、大中臣氏の氏寺である大福寺の相論に、裁許を下す立場にいたのではないだろうか。

二点目は、通海は、伊勢神宮領内に数多くの所領や地頭職などを所持しており、浜名神戸との間にも、少なからず関係性が視われるのである。通海の所領が分かる史料か

ら見ていくこととする。

【史料14】文永二年関東下知状案⁽⁷⁶⁾

「同前」

山内新三郎左衛門尉通茂法師^{法名}・左衛門三郎義一^{通字}与棚橋律師通海代僧禎海相論伊勢国河田郷地頭職事、

右、於彼職者、先祖通時法師建久八年補任之由、道專等申之間、尋明子細、可注申之旨、文永八年被仰六波羅畢、如所執進申詞記并両方所進証文等者、枝葉雖多、所詮、至当郷者通海先師得業行惠跡之条、道惠等不論申歟、而弟子継尊相伝之、与嫡弟尊海、尊海又讓通海、資師相承数十年之間、為太神宮領、道專等無申旨歟、如被定置者、今更不能濫訴、但継尊一期可知行之由被載、継尊給同九年御下文之間、存生之程無沙汰之旨雖申之、禎海論申之上、彼状紛失、頗為胸臆歟、加之、継尊建長二年夭亡、過廿箇年、初申出之由、禎海申之处、道專等初則死去年紀不知及之旨号之、後亦文応二年逝去之由有其説之旨称之、前後之詞涉両舌、経年序之後、企訴訟之条、無異儀歟者、於河田郷者、所被停止道專・義一濫訴也者、依鎌倉殿仰、下知如件、

文永十一年五月六日

史苑（第七五卷第一号）

武蔵守平朝臣在御判
相模守平朝臣在御判^(北条時宗)

文永一一（一二七四）年五月六日付けの鎌倉幕府から出された下知状によると、伊勢国河田郷の地頭職を巡って、通海は山内通茂と相論を起こしている。通海代の僧禎海の主張から、河田郷の地頭職は、行恵から弟子継尊が相伝し、嫡弟尊海・通海へと師資相承されていたことがわかる。結局は、山内通茂等の主張は退けられ、河田郷の地頭職は、通海のものとして認められた。河田郷は伊勢国多気郡にあった河田御園と関係するものと考えられる。蓮華寺の寺務を代々相承した人物に所領が継承されていたことから、蓮華寺（後の法楽寺）領であったことがわかる。通海が法楽寺の寺務を相承していた時、通海は末寺一ヶ寺を施入し、数百ヶ所の田畠が法楽寺領となった。当時、通海が相承していた法楽寺は広大な所領を持っていたことが確認される⁽⁷⁷⁾。河田御園内にある河田郷の地頭職も、その一つであった。

そのような所領などを持つ通海は、自身の作である『太神宮参詣記』にも、伊勢神宮領について記載している。特に浜名神戸に関して、弘安八年の浜名神戸司が押領された事件を書き記した箇所も見られる⁽⁷⁸⁾。多くの所領を持つ通海が、大福寺・摩訶耶寺のある浜名神戸のことに注意を

中世伊勢神宮領にみられる多元的支配権の性格（朝比奈）

払っていたことを考えると、通海と浜名神戸との間にも、所領を通じた利害関係があったことを覗わせる。その関係で、本末相論を裁定することになったのではないだろうか。

三点目は、平安時代以降、伊勢神宮の神域に、仏教に関わる物事が、忌避の対象となっていたことがあげられる。念珠や本尊などを持つ男女は、二鳥居より内に入ることは許されなかったのである^{②③}。この思想は、一三世紀後半の、祭主大中臣隆蔭にも受け継がれていた。次の史料によると、

【史料15】真言行者最極次第奥書^{②④}

（前略）右此口決者、醍醐寺報恩院伊勢参宮之時、祭主殿彼次第之不審申給之時、憲深法務、被付仰甲斐俊音院律師記之畢、神道神秘天照・遍照一体之習、可秘々々、

とある。祭主大中臣隆蔭は、醍醐寺三宝院流正嫡憲深の伊勢参宮に際し疑念を抱いた。そのため、憲深は、甲斐俊音院律師（頼瑜）に命じて、天照大神と空海（＝遍照金剛）が一体であることを記させたという。甲斐俊音院律師（頼瑜）が憲深に師事したのは、弘長元（一二六一）年^{②⑤}弘長三（一二六三）年であった。この大中臣隆蔭は、通海の兄にあたる。通海がその憲深から灌頂を授かり、三宝院流の印可を得たのが正嘉元（一二五七）年のことであった^{②⑥}。一三世紀後半の祭主一族の間で、忌避の考えが残っていた

ことが窺われる。しかし、一一世紀末に、中世の祭主裁判における手続きの大枠はできあがり、寺院間・僧侶間の相論が、祭主裁判に持ち込まれることが増えてきた。例えば鎌倉末期、渡会郡箕曲郷の松木住坊敷地と法常住院領田畠をめぐる、前法常院別当円然と光明寺僧惠観の相論などがあげられる^{②⑦}。そのような中、本末相論のような仏教色の濃い寺院間の訴訟に関しては、忌避の考えから祭主自身は関与せず、通海に委ねられた可能性がある。祭主に代わり、祭主一族出身で、真言宗醍醐寺派の高僧であった通海が、訴訟を担当することになったのではないだろうか。神仏隔離の原則によって、祭主裁判に一定の規制がかけられていたと考えることもできる。

以上、棚橋僧正と呼ばれた通海について三つの視点から論じてみた。通海は伊勢神宮祭主家の氏寺法楽寺を主宰し、数百ヶ所の田畠の所領を持つ、岩出流祭主家出身の高僧であったことは確認できた。伊勢神宮・真言宗寺院・法楽寺領といった多方面において、影響力を保持していたことが、相論において祭主に代わりうる権限を持つようになったと考える。

4 浜名神戸にみられる権限の分析

大福寺・摩訶耶寺間の本末相論では、祭主定世の他に、

同じ岩出流祭主家出身の大中臣隆直・通海が、裁定に關与していることがわかった。隆直による裁許だけでなく、祭主による裁許が必要であるという意識が、鎌倉時代の後期にはみられる。また、隆直・祭主定世が行使できない通海固有の機能が存在していた。相論における裁許の機能以外にも、隆直・祭主定世・通海に固有の機能というのは存在するのだろうか。例として、検断権・莊官職の任命権等の例を取り上げて考察していくこととする。

まずは、伊勢神宮が大福寺へ、検断権・殺生禁断権を付与した史料からみていく。

【史料16】弘安四年浜名神戸司代官戒阿奉免状写⁽⁸³⁾

大福寺寺内検断事

永奉免 薬師如来并可停止入寺内作殺生事、

右、奉免意趣者、医王善逝之靈地、十二大願之砌也、故致帰依之人、預衆病悉除之利益、凝信敬之輩、蒙十二神将之擁護、爰以永奉免寺内之検断者也、但於他人者、為衆徒之沙汰、可出之也、然者、致天長地久本所神宮之御祈禱、且為資累祖四恩之菩提、且為成弟子二世之悉地、且為興隆佛法、所奉免也、而彼寺之敷地者、故時定⁽⁸⁴⁾一向不輸、奉施入薬師如来之、更無他妨之地也、彼寄進狀割分神領、建立仏堂者、是非新儀云々、是尤可為御。禱⁽⁸⁵⁾祈所哉、然若後代人々

史苑（第七五卷第一号）

違此旨者、既有神宮忽諸之咎、有破佛法之罪、然者、現世安穩為後生善処、誰背之、誰破之、故迄至于末代、不可違失之矣、仍衆徒各成興隆佛法之励、且為權大夫殿・僧都御房并神戸司御代官安穩泰平、可被致御祈禱之忠之状如件、

弘安四年九月廿八日 敬白

浜名神戸司御代官沙弥戒阿在判史料16は、弘安四年九月二八日に、浜名神戸司御代官の沙弥戒阿が、大福寺宛に出した奉免状である。傍線部①によると、大福寺に対し、寺領内の検断権と狩獵殺生禁止の権限を与えていることがわかる。理由は大福寺は薬師如来の靈地であり、十二大願をおこなう場所であるということであった。ただし、大福寺以外の者が罪を犯した場合は、大福寺の僧侶の差配によって、浜名神戸司代官まで訴え出ることが、義務付けられている。傍線部②では、先祖の死後の冥福、現世来世の安樂成就、佛法の興隆と合わせて、本所伊勢神宮のために、祈禱をおこなうことが明記されている。また、権大夫殿・僧都御房ならびに神戸司御代官の三名が、安穩泰平でいられるよう、祈禱を行うことが最後に示されている。

この三人の名は、権大夫殿が修理権大夫であった大中臣隆直、僧都御房は通海⁽⁸⁶⁾、浜名神戸司御代官は戒阿であった

中世伊勢神宮領にみられる多元的支配権の性格（朝比奈）

ことが判明する。この三名が、大福寺へ寺領内の検断権と殺生禁断を認める権限を持っていたと考える。戒阿は浜名神戸司の現地代官であることから、この奉免状は、大中臣隆直や通海の意を受けて出されていたことになる。

また、同時期の弘安五年二月にも、寂禅から大福寺内の検断・殺生禁断を、戒阿の免状の通りに認める奉書が、浜名神戸香王宛に出されている。

【史料17】弘安五年寂禅奉書写⁽⁵⁵⁾

在御判

当神戸内大福寺之内検断并殺生禁断事、任戒阿弥陀
仏免状、無相違可被下知之由、仰所候也、仍執達如件、

弘安五年二月九日

寂禅奉

謹上 浜名神戸香王殿

寂禅に奉書を出させた人物は、他の史料からも確認できる。先ほど紹介した史料2の寂禅奉書は、棚橋殿の意を受けて出されたと、大福寺側は認識している。弘安七年頃の棚橋殿と呼ばれる人物は、大中臣隆直であった。寂禅は、大中臣隆直の意を受けて出していたのである。

史料17の寂禅奉書と同時期の弘安五年二月に、大福寺衆徒等が、祭主大中臣定世に裁許を仰いでいる。寺内における神戸司預所・給主等による検断行為を、停止させるため裁定を求めたのであった。それが次の史料になる。

【史料18】弘安五年大福寺衆徒等申状写⁽⁵⁶⁾

遠江国浜名神戸北原御園内大福寺衆徒等解申請 祭主殿御裁事、

請被特兵恩恤⁽⁵⁷⁾、以当寺定置本所御祈禱所、停止新

儀検断以下神戸司⁽⁵⁸⁾所并給主等自由張行状、

副進

本願主大中臣時定施入文案

前預所左衛門尉国光免状案

神戸司代沙弥戒阿免状案

右状、略之、

弘安五季二月 日 大福寺衆徒等上

先程の史料16で、弘安四年九月に、大福寺は神戸司代官戒阿によつて寺領の検断権は認められていたが、半年後には、寺領内の検断権は侵害されていることがわかる、

この大福寺衆徒等の訴えに対し、祭主大中臣定世は、次のような裁許を下している。

【史料19】（弘安五年頃）大中臣定世書下⁽⁵⁹⁾

依請、停止寺内検断并狩獵殺生以下、神戸司預所・給主等之新儀張行、永専祈禱莫致違乱、夫医王善逝之誓願者、衆病悉除之利益也、久保万年寿域、必成二世之悉地、仍与判如件、
祭主神祇権大副大中臣朝臣在御判

祭主定世は、大福寺領内で神戸司預所給主等の、検断と狩獵殺生以下の行為を停止するよう判断を下したのである。大福寺衆徒等が、今後も祈祷に専念できるように配慮した形となった。

史料16から史料19までは、元々は裁断されて、別々に保管されていた文書であった。それを、文政一〇年に大福寺住持であった法印快雅によって、大福寺領内の検断権に關連する文書として、一括して表装されたものである。大福寺衆徒からの訴えを受けて、祭主定世から大福寺へ出されたものと考えられる。⁸⁵⁾

弘安五年二月に、大福寺へ、二つの検断・殺生禁断に關する内容の書状が、出されていたことが確認される。一つは、史料19の祭主定世から、神戸司預所等の大福寺領内での、新儀張行停止命令が出された。もう一つは、史料17の隆直の意を受けた寂禪による、大福寺への検断・殺生禁断の権限の追認であった。検断権・殺生禁断権の追認という、祭主権力が行使しえない隆直固有の機能が存在していた。

次に浜名神戸の莊官職の任命権の所在について考えていく。鎌倉時代に作成された、伊勢神宮の祭主が発給する文書を集めた公文様式集である、『公文筆海抄』⁸⁶⁾から浜名神戸に關連する史料をみていく。

【史料20】文永八年祭主大中臣定世下文⁸⁷⁾

下 本宮神主

小長谷光

右人、補任遠江国浜名神戸中郷刀祢并御神酒鑑取高屋弘近雑念替職如件、任先例、早令勤仕神役公役、以下、

文永八年五月廿五日

(定世)

祭主神祇権大副大中臣朝臣

文永八(一二七一)年五月二五日、祭主定世は、浜名神戸中郷の刀禰并御神酒鑑取の職に、高屋弘近に替わり小長谷光を補任した。『公文筆海抄』と同じように、祭主が発給する文書の雛形を収録した『公文所初心抄』には、この史料の補足部分が傍らに載せてある。それによると「当神戸に諸郷の刀禰有り、各任符を賜うべきや」とあり、中郷だけでなく浜名神戸内の各郷の刀禰職は、祭主が補任することになっていたことが確認できる。同じく伊賀・鈴鹿とともに浜名の神戸預所職の補任も、祭主による下文によって行われている。刀禰や預所職など、現地莊官職の任命は、祭主固有の権限であったことがわかる。

以上、浜名神戸に対する検断権・殺生禁断権と莊官職任命権について、固有の権限の行使の事例をみてきた。大福寺へ対する検断権・殺生禁断権については、祭主権力と

は異なる隆直固有の権限の行使がみられる。荘官職任命権については、祭主による一元的な権限が機能していたことが確認できた。

おわりに

弘安年間に伊勢神宮領内で起こった、大福寺・摩訶耶寺間の本寺末寺を巡る相論を検討してきた。この相論を考察することによって、鎌倉後期の荘園領主としての、伊勢神宮の姿が明らかとなってきた。鎌倉後期の浜名神戸では、岩出流祭主家出身者による多元的な支配がみられた。「祭主」「大中臣隆直」「通海」といった、岩出流祭主家出身者の持つ多元的支配権は、大福寺・摩訶耶寺といった集団間の利害対立に、第三者として裁定を行使する機能を持っていた。祭主権力には行使しえず、隆直・通海が行使できる独自の機能が存していたのである。伊勢神宮という組織は、祭主を頂点とするピラミッド型のヒエラルキーを形成しているが、それとは別に、岩出流祭主家内には、祭主権力とは異なる性格の権力が複数存在していたことになる。

岩出流祭主家の持つ機能の一つには、被支配者間の争いに対し、第三者として、これを調停する媒介的機能を果たすことにあったが、在地社会側からの対応を見る限り、

あらゆる上位権力による調停を利用しようとする傾向が読み取れた。例えば、大福寺は、土御門殿（＝隆直）へ訴え、摩訶耶寺との調停を依頼していた。この調停が不調に終わると、現職の祭主定世へ裁定を求めた。在地社会で起きた相論では、伊勢神宮という組織のトップである祭主と、岩出流祭主家出身者という複数の権力形態が、在地社会側にとって必要とされていたことになる。祭主と岩出流祭主家出身者が相互に補完しあうことで、浜名神戸への支配権を行使していたのではないだろうか。

註

- (1) 鈴木国弘「伊勢神宮と神戸の変質」、『史学雑誌』七五編一一号、一九六六年。鎌倉佐保「伊勢神宮の神郡支配の構造と特質―平安末期の神三郡を中心として―」、『駿台史学』九五号、一九九五年・勝山清次「伊勢神宮神三郡の戸田と寄戸」、『中世伊勢神宮成立史の研究』第五章（塙書房、二〇一二年、初出二〇〇三年）。
- (2) 中世後期に至るまで、浜名神戸についての豊富な情報を持つ「大福寺文書」から、条里制遺構・内部構造・年貢輸送・現地比定・荘官の存在形態・地域形成などの研究が蓄積されてきた。歌川学「遠江国浜名郡に於ける条里制の遺構」、『愛知大学文学論叢』二〇、一九六〇年、西岡寿一「遠江国浜名神戸について」、『神道史研究』一八卷三号、一九七〇年、南出真助「中世伊勢神宮領荘園の年貢輸送―三河・遠江を事例として―」、『人文地理』三一巻五号、一九七九年、南出真助「大福寺領「注文」の現地比定」、『地域をめぐる自然と人間との接点』、細井淳志郎先生退官記念論文集出版事業会、一九八五年、山本隆志「室町期における東海荘園の知行構造」、『国立歴史民俗博物館研究報告』一〇四、二〇〇三年、山本倫弘「中世前期地域社会の形成と権門体制―遠江国における「地域社会論」の視点―」、『静岡県地域史研究』一号、二〇一一年。『三ヶ日町史』上巻（三ヶ日町、一九七六年）。
- (3) 『静岡県史通史編二 中世』（一編四章二節 永村眞執筆分担分）。
- (4) 伊勢大神宮御領注文（新校群書類従本「神鳳抄」『鎌倉遺文』三二八六六号）。「神鳳抄」は本神戸と新神戸を取違えてい

る。

- (5) 承暦四年五月八日条（「帥記」、『静岡県史資料編4 古代』一四二八号）。
- (6) 建久三年八月日伊勢大神宮神領注文（「神宮雜書」、『鎌倉遺文』六一四号）。
- (7) 弘安四年九月二八日浜名神戸司代官戒阿奉免状写（「大福寺文書」、『静岡県史資料編5 中世一』一三七三三号。弘安五年二月日大福寺衆徒等申状写（「大福寺文書」、『静岡県史資料編5 中世一』一三八八号）。なお「大福寺文書」の引用にあたっては、東京大学史料編纂所所蔵影写本によって刊本の翻刻を一部修正した）。
- (8) 年月日未詳実阿申状案（「大福寺文書」、『静岡県史資料編5 中世一』一五一六号）。現地の荘園管理機構についての詳細は別稿を用意している。
- (9) 「給人引付諸神領注文」（『静岡県史資料編6 中世二』二四二号）。
- (10) 伊勢神宮司符写（「宮司公文抄」、『静岡県史資料編6 中世二』一九三一号）。
- (11) 文明七年四月二四日政所賦銘引付（「親元日記別録」、『静岡県史資料編6 中世二』二六二〇号）。
- (12) 天正一〇年三月二日正親町天皇繪旨写（「夏目文書」、『静岡県史資料編8 中世四』一四九六号）。
- (13) 東京大学史料編纂所所蔵謄写本「瑠璃山乗」（原蔵大福寺）所収。
- (14) 三ヶ日町只木在住の山本初雪氏に案内していただき、現地にて確認をおこなった。
- (15) 承元三年一〇月日大中臣時定寄進状写（「大福寺文書」、『静岡

中世伊勢神宮領にみられる多元的支配権の性格（朝比奈）

- (16) 岡県史資料編5中世1『五六〇号』。
伊藤聡『神道とは何か―神と仏の日本史―』（中央公論新社、二〇一二年）七五頁。
- (17) 弘安四年九月二八日浜名神戸司代官戒阿奉免状写（『大福寺文書』、『静岡県史資料編5中世1』一三七三号）。
- (18) 正安二年五月実阿寄進状（『大福寺文書』、『静岡県史資料編5中世1』一五一五号）。
- (19) 応長元年八月二六日大中原信寄進状（『大福寺文書』、『静岡県史資料編5中世1』一六三二号）。
- (20) 文正元年九月八日良秀寄進状（『大福寺文書』、『静岡県史資料編6中世2』二五一六号）。
- (21) 文明六年六月一二日悟溪寄進状（『大福寺文書』、『静岡県史資料編6中世2』二六一五号）。
- (22) 文明七年四月日尊意亮券（『大福寺文書』、『静岡県史資料編6中世2』二六二一號）。
- (23) 延徳二年六月二三日岡本昌光亮券（『大福寺文書』、『静岡県史資料編7中世3』一三九号）。
- (24) 元弘三年一月一二日宇志実阿寄進状（『大福寺文書』、『静岡県史資料編6中世2』二五五号）。
- (25) 元弘四年八月二二日忍願弥四郎連署寄進状（『大福寺文書』、『静岡県史資料編6中世2』四九号）。
- (26) 暦応四年二月尾名大式亮券（『大福寺文書』、『静岡県史資料編6中世2』二七七号）。
- (27) 寛正二年大福寺不動堂建立記（『大福寺文書』、『静岡県史資料編6中世2』二四二三号）。
- (28) 応永一四年一月一二日瑠璃山年録殘編裏書（『大福寺文書』、『静岡県史資料編6中世2』一四一七号）。
- (29) 応長元年一月二九日大福寺御堂供養記（『大福寺文書』、『静岡県史資料編5中世1』一六三五号）。
- (30) 「延宝七年摩訶耶寺縁起覚書」静岡県立中央図書館歴史文化情報センター所蔵複製写真（原藏摩訶耶寺）。
- (31) 弘安七年三月六日寂禅奉書写（『大福寺文書』、『静岡県史資料編5中世1』一四〇五号）。
- (32) 応長元年一月二九日大福寺御堂供養記（『大福寺文書』、『静岡県史資料編5中世1』一六三五号）。
- (33) 寛正二年大福寺不動堂建立記（『大福寺文書』、『静岡県史資料編6中世2』二四二三号）。
- (34) 天文二一年一月一五日棟札銘（『白山神社所蔵』、『静岡県史資料編7中世3』二一五三号）。
- (35) 天文二三年一月二日棟札銘写（『夏目文書』、『静岡県史資料編7中世3』二二六二号）。
- (36) 応仁二（一四六八）三月一日景久亮券（『大福寺文書』、『静岡県史資料編6中世2』二五四五号）。
- (37) 弘安七年三月六日寂禅奉書写（『大福寺文書』、『静岡県史資料編5中世1』一四〇五号）。
- (38) 「文政一〇年住持法印快雅表具覚書」東京大学史料編纂所所蔵影写本『大福寺文書』一〇丁（原藏大福寺）所収。
- (39) 浜名香王に関連する史料は、弘安五年二月九日寂禅奉書写（『大福寺文書』、『静岡県史資料編5中世1』一三八四号）のみ確認される。香王は菩薩名ため、幼名「香王」「香王丸」と呼ばれていた人物だと考える。
- (40) 弘安八年一月二日大福寺住僧等陳状写（『大福寺文書』、『静岡県史資料編5中世1』一四二二号）。
- (41) 永享七（一四三五）年に摩訶耶寺は「家敷」が多いこと

を理由に大福寺に行ってきた沙汰を停止する。摩訶耶寺と大福寺との経済的な協力関係がみられる（『瑠璃山年録残編裏書』東京大学史料編纂所所蔵影写本「大福寺文書六」（原蔵大福寺）所収）。

(42) 弘安八年二月一三日宗直奉書（「大福寺文書」、『静岡県史資料編5中世1』一四二二号）。

(43) 正応五年正月日大福寺住僧等申状写（「大福寺文書」、『静岡県史資料編5中世1』一四六二号）。

(44) （年未詳）大福寺住僧等申状案（「大福寺文書」、『静岡県史資料編6中世2』一一〇一号）によれば、弘安一年に棚橋僧正が裁許を下したことになる。

(45) 永村眞「『真言宗』と東大寺―鎌倉後期の本末相論を通して―」（中世寺院史研究会編寺院史論叢1『中世寺院史の研究』下、法蔵館、一九八八年）。

(46) 康応二年大福寺住僧等申状土代（「大福寺文書」、『静岡県史資料編6中世2』一一〇〇号）。

(47) （年未詳）蘊暉書状（「大福寺文書」、『静岡県史資料編6中世2』一一〇九号）。

(48) 湯山学「鎌倉御所奉行・奉行人に関する考察―鎌倉府職員機能と構成―」（『鎌倉』五一号、一九八六年）。山田邦明「鎌倉府における訴訟手続」（『鎌倉府と関東―中世の政治秩序と在地社会』（校倉書房、一九九五年）一二五頁）。

(49) 佐藤進一「室町幕府守護制度の研究 上―南北朝期諸国守護沿革考証編』（東京大学出版会、一九六七年）九四頁。

(50) 至徳二年一月六日浜名政信寄進状（『雲頂庵文書』、『神奈川県史』四九九六号）、至徳二年二月二六日関東公方足利氏満寄進状写（「相州文書所収鎌倉郡統灯庵文書」、『神

奈川県史』五〇〇一号）。

(51) 修理権大夫某下知状案（「遠江大福寺文書」、『鎌倉遺文』一五一〇九号）。

(52) 嘉禄三年一〇月一二日北条時房下文（「蒲神明宮文書」、『静岡県史資料編5中世1』七〇九号）。

(53) 明徳元年八月日大福寺住僧等連署起請文（「大福寺文書」、『静岡県史資料編6中世2』一一一四号）。

(54) この文書が作成された時期の「公方」については、同時代の史料で、伊勢国内で、「公方」が祭主の意味で使われている。（西山克「伊勢三神郡政所と検断 上・下」（『日本史研究』一八二・一八三、一九七七年）。

(55) 明徳元年五月大福寺住僧等連署起請文写（「大福寺文書」、『静岡県史資料編6中世2』一一〇八号）。

(56) （年未詳）二月一八日藤原重氏書状（「輯古帖御裳濯和歌集裏文書」、『鎌倉遺文』二一五〇三号）。

(57) 伊勢大神宮御領注文（新校群書類従本「神鳳抄」、『鎌倉遺文』三二八六号）。

(58) 「祭主補任」『神道大系神宮編四（上）』（神道大系編纂会、一九八四年）。

(59) 岡田莊司「中世の大中臣祭主家」（『大中臣祭主藤波家の歴史』、続群書類従完成会、一九九三年）一二八頁。

(60) 「二所太神宮例文」『神道大系神宮編四（上）』（神道大系編纂会、一九八四年）。

(61) 前掲註（59）岡田論文、一二四頁。

(62) 「大福寺真宣寺両寺本末相論文書案」東京大学史料編纂所所蔵影写本「大福寺文書」一三二（原蔵大福寺）所収

(63) 「文政一〇年住持法印快雅表具覚書」東京大学史料編纂所

中世伊勢神宮領にみられる多元的支配権の性格（朝比奈

所藏影写本「大福寺文書」一〇丁（原藏大福寺）所収

(64) 「佐々木系図」（『続群書類従 第五輯下』）。

(65) 多賀宗集「弘安八年「霜月騒動」とその後」（『論集中世文化史 上 公家武家篇』法蔵館、一九八五年、初出は

一九四〇年）三六四頁。

(66) 安達泰盛乱自害者注文（『梵網戒本疏日珠鈔卷三〇紙背文書』『静岡県史資料編5中世』一四二〇号）。

(67) 「太神宮参詣記 下」（神宮司庁編『神宮参拜記大成』、西濃印刷、一九三七年）七〇頁。

(68) 弘安八年九月浜名神戸司大江助長申状（『勘仲記弘安十年二月巻裏文書』『静岡県史資料編5中世』一四一九号）。

(69) （弘安八年力）八月二九日神祇大副某举状（『実躬卿記乾元二年六月巻紙背文書』『静岡県史資料編5中世』一四八九号）。

(70) （弘安八年力）十一月七日大中臣定世举状（『勘仲卿記正応二年九月十月巻裏文書』『静岡県史資料編5中世』一四四四号）。

(71) 「大江系図」（『続群書類従 第七輯下』。福島金治「安達泰盛と鎌倉幕府―霜月騒動とその周辺」（有隣堂、二〇〇六年）一八〇頁。

(72) 「祭主補任」（『神道大系神宮編四（上）』（神道大系編纂会、一九八四年）一二五頁。

(73) 佐藤眞人「大中臣氏の造寺と通海」（『大中臣祭主藤波家の歴史』、続群書類従完成会、一九九三年）三二〇頁。小島鉦作「伊勢神宮史の研究」（小島鉦作著作集二、吉川弘文館、一九八五年）八九頁。

(74) 前掲註（73）小島著書、九九頁。

(75) 「永仁五年假殿記紙背文書」（『日本塩業体系』史料編古代・中世二）。市沢哲「永仁五年仮殿遷宮記」紙背文書の

世界・祭主氏寺釈尊寺について」（『神戸大学文学部紀要』二七号、二〇〇〇年）。

(76) 文永十一年五月六日関東下知状案（『山城醍醐寺文書』『鎌倉遺文』一一六五二号）。

(77) 前掲註（73）小島著書、一〇一頁。

(78) 「太神宮参詣記」（神宮司庁編『神宮参拜記大成』、西濃印刷、一九三七年）。

(79) 伊藤聡「神道とは何か」（中央公論社、二〇一二年）七六頁。

(80) 「真言行者最極次第」（智山伝法院編集『真福寺文庫撮影目録 大須観音宝生院』真言宗智山派宗務庁、一九九七年）二〇五頁。

(81) 伊藤聡「天照大神・空海同体説―東密三宝山流の秘説形成―」（『中世天照大神信仰の研究』、法蔵館、二〇一一年、初出一九九五年）二四七頁。

(82) 訴人・論人による訴状・陳状の提出は、直接祭主政所（公文所）に届けるか、祭主使を介するルートがあった。祭主による裁許の下知は、下文の他には、外題・御教書の形をとって出され、祭主使（検非違使）を通して訴人・論人に

伝えられる。弘安年間前後に、祭主の裁許状が外題から下文に変わっていった。（勝山清次「中世伊勢神宮成立史の研究」（塙書房、二〇一二年）六九頁以降参照。佐藤泰弘「伊勢神郡と祭主の裁許」（『大山喬平「中世裁許状の研究」、塙書房、二〇〇八年）三一五頁以降参照）。

(83) 弘安四年九月二八日浜名神戸司代官戒阿奉免状写（『大福寺文書』、『静岡県史資料編5中世』一三三七号）。

- (84) 通海は、弘安元（一二七八）年、僧都の位にいたことが確認できる（富小路殿愛染王法伴僧交名案「山城醍醐寺文書」、『鎌倉遺文』一三〇五二）。
- (85) 弘安五年二月九日寂禪奉書写（「大福寺文書」、『静岡県史資料編5中世1』一三八四号）。
- (86) 弘安五年二月大福寺衆徒等申状写（「大福寺文書」、『静岡県史資料編5中世1』一三八八号）。
- (87) 弘安五年二月大福寺衆徒等申状写（「大福寺文書」、『静岡県史資料編5中世1』一三八八号）。
- (88) 「文政一〇年住持法印快雅表具覚書」東京大学史料編纂所蔵影写本「大福寺文書一」（原蔵大福寺）所収の一〇丁に「右古昔裁断書一卷九通文政十年丁亥春表装現住法印快雅（印）」と書かれている。
- (89) 「解説と史料解題」『三重県史資料編中世1（上）』（三重県一九九七年）一三三二頁。
- (90) 文永八年五月二五日祭主大中臣定世下文写（公文筆海抄、『三重県史資料編中世1（上）』一一九六頁）。
- (91) （年未詳）祭主大中臣朝臣下文（公文所初心抄）、『三重県史資料編中世1（上）』一二二四頁。
- (92) （年未詳）祭主大中臣朝臣下文（公文所初心抄）、『三重県史資料編中世1（上）』一二二四頁。
- （本学大学院文学研究科史学専攻博士課程後期課程）

表 大福寺・摩訶耶寺間相論の経緯

年月日	西暦	相論の内容	出典
弘安7年3月6日	1284	摩訶耶寺衆徒は舍利会で舞を務めるための童子派遣を、大福寺に要求する。この要求に対抗するため、大福寺は棚橋殿(大中臣隆直)へ陳状を提出する。棚橋殿の意を受けた寂禅から、両寺に対し、本末相論を止めて大福寺童子を摩訶耶寺へ派遣するよう命ずる奉書が出される。	史料2
(弘安7年頃)	1284	修理権大天殿(大中臣隆直)が、本末相論の停止を命ずる。(舞童派遣は命じたものと推測される。)	史料8
弘安8年12月13日	1285	大福寺は陳状を提出し、摩訶耶寺衆徒等から要求される舍利会舞童派遣の停止を伊勢神宮側に求めた。伊勢神宮側からは、今後は摩訶耶寺からの偽訴(舞童派遣要求)を停止するようという御内談があり、兵名神戸預所宛に、奉書が下される。	史料4
弘安8年12月	1285	摩訶耶寺住僧等から、大福寺は摩訶耶寺の末寺であるという主張がなされ、摩訶耶寺舍利会への舞童派遣を要求する。そのため大福寺側は「土御門殿(大中臣隆直)」へ訴え、嚴重な審議のもと、摩訶耶寺による強引な大福寺の末寺化の件を停止するようという、裁許が土御門殿から下される。しかしながら「土御門殿」の命令は摩訶耶寺側に聞かせることはなく、舍利会の頭役を動めるよう、強引に誓約させようとする。大福寺住僧等は、土御門殿下知状だけでは、摩訶耶寺の狼藉は到底収まらないと考え、伊勢神宮祭主大中臣足世からの裁定を求める。	史料3
弘安11年	1288	棚橋法印(御房の御前)にて両寺が対決をおこなう。今後、本末関係の争いは一切停止するよう、裁定が下される。	『県2』1101
正応5年正月 (康応元年頃)	1292	再び摩訶耶寺の寺僧等が、大福寺は末寺であると主張し、舍利会の頭役・舞童派遣を負担するよう、大福寺に圧力をかけてきた。そこで大福寺住僧等は伊勢神宮側の裁許を仰ぐため訴えをおこす。	史料5
6月13日	1389	鎌倉府御所奉行の細陣(佐々木氏)から、大福寺衆徒中へ、法華經供養の時の摩訶耶寺と大福寺の僧侶の座次については、出家受戒後の年数によって着座するよう沙汰があった。	史料7
康応2年2月	1390	摩訶耶寺僧侶等が鎌倉府へ偽りの主張を根拠に、大福寺より上座に位置することを主張してきた。対する大福寺住僧等は、鎌倉府へ偽りの主張を行った摩訶耶寺の行為を糾弾する。	史料6
明德元年5月	1390	摩訶耶寺の主張する座次について反論するため、大福寺は僧衆21名による起請文を京都へ提出する。	『県2』1108
明德元年8月	1390	摩訶耶寺の偽訴を糾弾するため、京都へ熊野山牛王宝印紙を三枚繼いだ裏に大福寺住僧17人の署名と花押を副えた起請文を送る。	史料10

※『静岡県史資料編6中世2』を『県2』と略して表記。